

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第42号

平成29年2月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

弁の内侍、西蓮華台院（吉野）に入り、正行の菩提弔う

文誉鉄牛上人、西蓮華台院跡に西蓮寺開く

— 四條畷の悲歌 西蓮寺と弁の内侍 —

大きな本尊に圧倒される

1月17日、扇谷は鉄牛上人（長宗我部文親）が開基した西蓮寺を訪れた。

本堂に通され、本尊の大きさに圧倒された。西蓮寺の本尊の阿彌陀如来坐像は、丈6像、龍門大仏ともいわれる仏様で、胴体部は藤原期の作、サクラ材の寄木造で完全な内割り（木造の内部をえぐり空洞にする技法）が施され、一面に浄土三部経が書写されているとのこと。胎内はゆうに3～4人が入れる広さがあるとも。

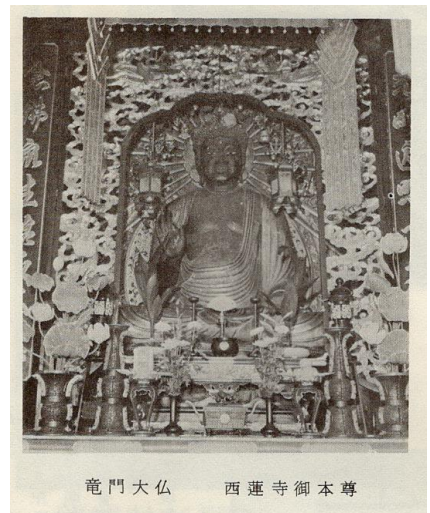
吉野山の北方に位置する竜門の郷は、北の方に竜門岳を仰ぎ、左右の稜線に連なる山々の山裾に湧き出た清らかな泉は、幾重の谷を下り、集まって竜門川となり、吉野川へと注ぐ。西蓮寺は、津風呂川をせき止めて築かれた津風呂湖と竜門岳に挟まれて広がる龍門の郷に建っている。（写真下：西蓮寺全景 写真右：本尊西蓮寺小冊子より）

ちなみに、私は津風呂の地で生まれ、4歳のとき、現在の四條畷に移ったので、とりわけ縁を感じるが、私の脳裏には西蓮寺で五重を受けた二人の祖母（父方・母方）



の写真が今もしっかりと焼きついている。

西蓮寺では、文誉鉄牛上人の300年祭にあたって編纂された小冊子を発行しておられ、私も頂戴をしたので、その冊子を下に西蓮寺を紹介する。



吉野拾遺に載る弁の内侍

竜門岳の麓には、かつて竜門寺が建っており、竜門の滝の岩頭に竜門寺跡が残る。竜門寺は、奈良時代前期に創建されたと伝えられ、竜門滝を配し仙境に営まれた古代の頃は、竜神信仰と深い関係があったもので天台密教系の寺であったと推定される。

中世に至り、竜門寺の寺領荘園として竜門庄が設けられ、次第に平地仏教的な展開を遂げ、支院として仏師院・竜華台院・西蓮華台院などが建立された。

ここで吉野拾遺に載る弁の内侍についてみておこう。

吉野拾遺には、「先帝（後醍醐帝）の御時、辨の内侍といひけるは、右少辨俊基朝臣の御娘なりけり。」「正行なかりせば、いと口をしからましを、よくこそはからひつれ」とて、『内侍を正行に賜はせん。』と、勅（みこと）のり）ありければ、かしこまりて、**とても世にながらぶべくもあらぬ身のかりの契りをいかで結ばむ** と奏し

て辞しにけり。其の時は心得がたくおぼえしが、後におもひあはされて、いとど惜しみあひにけり」と記されている。

そして、冊子は以下続ける。

やがて南北朝史の悲歌は四條畷の決戦場に移り、正行はここで壮烈な最期を遂げるが、これを知った辨の内侍は、初めて正行の真意を悟り深い悲しみに打ち沈むのであった。

その後彼女は正行への追慕の情絶ちがたく、ついに黒髪を切り、尼となって吉野山を下り、竜門の西蓮華台院に入ったのである。彼女は西蓮華台院の境内に草庵を結び、聖尼庵と称し、そこで寂滅する日まで正行の菩提を弔い、念仏の生活によって正行への貞節を守ったといわれている。

大君に仕えまつるも今日よりは 心にそむる墨染めの袖

これは正平3年(1348)辨の内侍出家の詠草である。

文親、吉野に踏み入った心情は

現在の西蓮寺が開かれたのは、江戸時代の初期、文誉鉄牛上人による。

(楠正行通信 41号で触れたように、長宗我部元親と楠氏末裔の娘との間に設けられた6男)文親は四国を脱し大和へ入り吉野路への逃避行を続けるのである。

**四国路の吉野川をば下り来て 大和路のぼる美吉野の川
うちこて讃岐刈田の豊田をば かりの名とせん忍ぶわが家の
違われて来て象(キサ)の谷間にかかりけり 夢路むさがるうたた寝の橋
武具をすててみやまにすみぞめの 衣にかかるみよしの花**

(象谷「喜佐谷」、「うたた寝橋」等吉野町中荘地区に現存する地名)

四国に栄えた長宗我部一門の滅亡の危機に一点の種火となった文親が、うらぶれて吉野の喜佐谷へ忍び入った心情を、この歌詞の中に汲み取ることができる。

吉野の山に庵を定めた長宗我部文親は、出家して名を文誉鉄牛と号し、名利如意輪寺の荒廃に心を傷め浄財を得て本堂はじめ諸堂を営繕改修して同寺を復興、如意輪寺中興の租と仰がれた。

そして、鉄牛上人は、徳川4代将軍家綱の頃(在位：慶安4年1651～延宝8年1680)、南朝ゆかりの辨の内侍を顕彰するため西蓮華台院の跡地に精舎を開き、その名を継いで累徳山・円成院西蓮寺と称したのが現在の寺号である。

隠棲した鉄牛上人は豊田儀右衛門と名乗り、代々豊田氏を称した。その末裔は今も大阪市内に住む。

吉野地方は勤王の気風の強いところであるが、中でも竜門郷は、伊勢の北畠親房が吉野の皇居へ食糧を輸送するのを助けたことや、西大寺への年貢米をことごとく吉野皇居へ納米した事績など、古い文献にも明らかで、朝廷への忠勤のほどを窺い知ることができる。

楠氏の末裔でもある鉄牛上人は、とりわけ勤王の志篤く、自ら後醍醐帝の塔の尾の陵に奉仕し、地方における

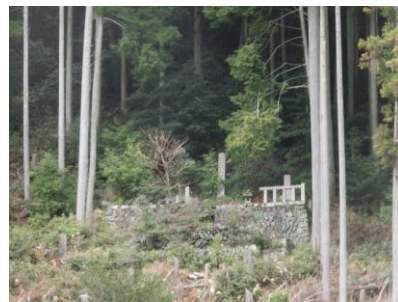
そうした気風を高揚したので、一層郷民の深謀が集まったのであろう。

従兄弟の嫁ぎ先も長宗我部氏末裔

帰途、吉野町喜佐谷に長宗我部氏末裔の豊田家の墓碑が建っていると聞き、訪ねた。

喜佐谷には、私の母方の従兄弟が嫁いでいるので、

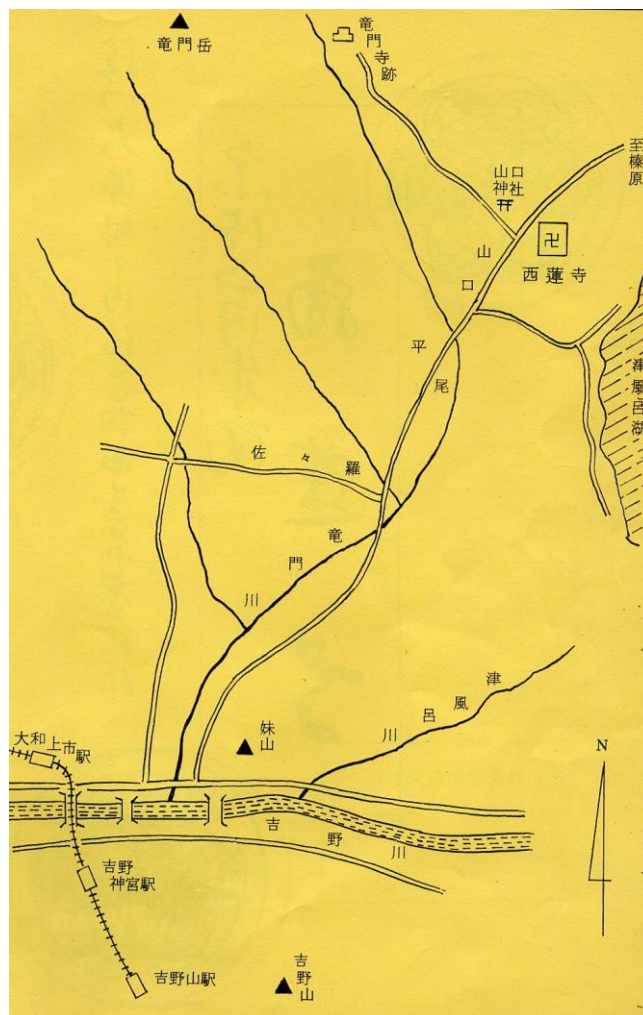
案内を頼んだ。(写真：喜佐谷にある豊田家の墓碑)



豊田家の墓は雑木が茂り近寄れなかったので遠くから写真を撮ったが、意外な事実を知ることになった。従兄弟の嫁ぎ先の墓に案内してもらったのだが、何と、その墓石には「長曾我部・・・」の文字が刻まれていたのである。

従兄弟の嫁ぎ先も、長宗我部氏の末裔であったようで、従兄弟も義母にその旨話によく聞かされたという事であった。

この日の吉野訪問は、様々な縁を感じられずにはおられなかった。(下図：西蓮寺発行小冊子より)



(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)